

日展 ニュース

No. 189

<https://www.nitten.or.jp/> 令和7年2月17日発行

編集兼発行人 神戸峰男



特集 第11回日展





第11回日展 右から合田文化庁次長、宮田理事長、逢坂国立新美術館長によるテープカット

第十一回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 宮田 亮平

日展は文展以来通算一一七回を迎えました。数々の変遷をたどり、今回、第十一回日展を国立新美術館で開催できましたことは、この上ない喜びであります。

いま世界は複雑かつ混沌な時に至っております。この時こそ藝術とりわけ美術の世界の役割は、重要かつ大切であると感じております。

今回展でも、万全を期して準備を整え、会場に足を運んでいただくことによって、皆様が安らぎや勇気そしとときめきを感じ、明日の糧としていただけるよう、出品者一同渾身の作品を展示いたしました。また、美術との距離を縮め、より身近に感じていただけますよう、作品解説会や各種イベントも実施いたしました。

お蔭をもちまして、盛況のうちに東京における展覧会を終了することができ、現在は巡回展を開催いたしております。

ご支援いただいた皆様に改めて深く感謝申し上げますとともに、今後とも何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二四年
第十一回 日展受賞者一覽

大臣賞

日本画 文部科学大臣賞 樹の一本は一つの木
洋画 文部科学大臣賞 ECHOー裸婦と猫ー
彫刻 内閣総理大臣賞 風のおとー萌しー
工芸美術 内閣総理大臣賞 月の器・帰路
書 内閣総理大臣賞 花の姿

東京都知事賞

日本画 東京都知事賞 五月の風に
洋画 東京都知事賞 人生設計
彫刻 東京都知事賞 時の流れに
工芸美術 東京都知事賞 黎 紅
書 東京都知事賞 袁 凱 詩

日展会員賞

日本画 日展会員賞 ソロモンの指環
洋画 日展会員賞 9月・なごり
彫刻 日展会員賞 空
工芸美術 日展会員賞 沼の水 中木
書 日展会員賞 重 雍 襲 熙

特選

第一科《日本画》
猩 静かな夜に 猩
街 刻の訪問者々々
時の訪問者々々
ラビットホール
R(ゼロイチ) Binary
結びつき
やわらかな峰々
風の色の色
能島 文宣
寺久保 久利
上田 久利
武腰 一憲
田中 徹夫

第二科《洋画》
GYM
garden
アヴェ・マリア
青 嵐
遼 遠
山 林
プロヴァンスの道
支 度
朧 Bibio bibuli
梅
金 築 秀 俊
久 保 尚 淳
佐 藤 智 子
関 野 二
田 辺 康 子
福 田 次 子
山 内 大 介
山 本 佳 子
結 城 唯 善
吉 成 浩 昭

第三科《彫刻》
はなびら
テナイベア
酒井 華智

ベルベットの月
残 闕
彼 岸 へ
竹内 晋平
田原 華
宮地 淑江

第四科《工芸美術》
芽ぐむ
風に乗って
a 神殿
Departure 出発
象嵌彩 晩秋の夕暮れ
Aqua・屋久島
光の雨
始まのり
月の稜線
井上 絵美子
大西 重広
木本 一之
葛井 保秀
近藤 純学
下村 純子
竹河 いみ子
戸出 克彦
富岡 大資
西川 勝

第五科《書》
紅蓮の炎
み吉野
つくづく
猿 聲
范 石 湖
稲 妻 詩
蟠 屈 拏
高 青 邱
劍 蔵
莊 巖
赤澤 寧生
井上 邦子
小野 玲華
雲 山 一 弦
小 林 千 早
谷 口 成 孝
辻 敬 齋
平 樂 大 齋
宮 本 耕 齋
森 上 洋 光

座談会

「第11回日展 審査を終えて」



出席者

理事長 宮田亮平

副理事長 事務局長
神戸峰男

第一科 日本画

審査主任 渡辺信喜

第二科 洋画

審査主任 佐藤 哲

第三科 彫刻

審査主任 宮瀬富之

第四科 工芸美術

審査主任 春山文典

第五科 書

審査主任 星 弘道

司会 福光幽石
(日展ニュース委員)

司会 本日は、本当にお忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。司会を担当させていただきます。福光幽石と申します。何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

まず初めに、宮田理事長から、今回の第十一回日展の審査に関しまして、審査の現況を中心にいろいろとお話しただきたいと思ひます。宮田先生、よろしくお願ひいたします。

宮田理事長 先生方、昨日は、授賞式、多分その後は楽しくも厳しい評論を兼ねたお酒の席もあつたのではないかと思います。

このニュース座談会というのは、今回は審査主任の先生方にお集まりいただいたのですが、審査をした時の印象というか、こんなところが非常に魅力的であつたとか、ここは改めてもう一回見直したほうがいいんじゃないかとか、その両方も含めた上で、ところどころに逸話なども入れていただきながらお話を頂戴できれば、大変ありがたいです。どうぞよろしくお願ひいたします。

今回第十一回展、しかも一一七回と続く展覧会でございますが、昨日、授賞式で都倉文化庁長官が大変いい話をしてくれましたね。

宮田 亮平



あれはとても大事な事かなと思ひます。それは、私なりの解釈の仕方ですけれども、お客様と作家との間の距離をぐっと縮めることと同時に、作品を愛でてくれる人たち、この三つの関係がちゃんともあるということは大変なことでありまして、先生方も作品をお選びになる時に、その辺のこともいろいろと気遣いながら審査をなさつてくれたのかなという気がいたしております。

司会 ありがとうございます。続きまして、事務局長で副理事長でもあられます神戸先生、審査終了までのことに関して、簡単に一言お願ひいたします。

神戸事務局長 審査の終了までの全般というようなお話を今いただいたのですが、私、今年、三科の審査に携わり、ほかの科を拝見

する機会が少なかったもので、逆に各科の審査主任の先生から各科はどんな状況であったかということをお聞かせいただきたいたいと思っております。

私は、日展の方向として伝統と、その伝統を踏まえた革新的な作品とがうまく対応できてくる、あるいはそういう方向へ変化していかなくやいけない時を迎えているんじゃないかと感じております。

その辺の将来に向けての話も含めて、先生方からお聞かせいただけたらいいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



都倉俊一文化庁長官来館

司会 ありがとうございます。それでは、一科の渡辺先生から順番に、作品の傾向、あるいは来年応募される方にお伝えしておきたいことを含めて、よろしくお願ひいたします。

審査の概況

渡辺 今年度は三三五点の応募があり、昨年より八 points の減でした。入選は一五九点、うち一六 points が新入選です。

第一回展覧会打ち合わせ会で、審査に当たり、各審査員から抱負を述べていただきました。審査に当たるときには、審査員としての自覚と作家の自負を踏まえ、少々の破綻があっても、ある意味、自己主張のある、前向きな、若々しく個性豊かな作品を選び、魅力ある会場にしたいということを伝えました。

次に、係から六室と七室の会場の壁を取り広くしたいと提案がありました。皆に諮り、了承していただき、展覧会場に展示しますと、動線もよく、見やすく、結果的にはいい会場になったなと思っております。

昨年は一六五点の入選でしたが、壁一つ取ると裏表で四 points の作品が

減ります。その四 points 減った数で一六〇 points をめどに審査を行った結果、一五九 points の入選となりました。

司会 ありがとうございます。続きまして、二科の佐藤先生、よろしくお願ひいたします。

佐藤 審査は一審、二審、三審と行い最終的には五三九 points の入選となりました。出品点数は一三七 points で昨年よりも八八 points 減っています。このところ出品者が、毎年そのくらい減少しています。ですから、この辺で出品規定を検討しないともずいぶんではないかと、洋画のほうで話し合っています。

近頃は、作品の傾向が変わってきたように思います。それで今年度は、こんな作品が入選したのかということがないように、それは気をつけたいつもりです。特に特選の作品や、三賞の作品は、優れた良質の作品を選出しましたのでそれは絶対にはずさないと思います。そして、展示も気をつけたいと思います。

司会 ありがとうございます。続きまして、三科の宮瀬先生、よろしくお願ひいたします。

宮瀬 私は、初めての審査主任ということで、振り返ってみると、入選の発表を待つ緊張感と自らの審査に緊張したということと、重なるようになってきます。

彫刻は、八三 points の出品者数、入選数は五三 points、うち一〇名が新入選でした。他の科と比較しますと、随分数字が少ないようでありますが、彫刻という分野の特殊性もありまして、数で測れないところがあるということをご理解願えればありがたいと思います。

特に、第七回展のコロナの頃から激減したような感じを受けますが、前年度は一〇 points 増えました。しかし、今年は一〇 points 少なかったというようなことを繰り返しているようなところがあります。

さて、審査に当たりまして、一審、二審、三審と厳正、公正に行い、多少形が整っていない、感性が光っているもの、何か新しい方向性を示す魅力のある作品を選んでいこう、これは審査員全員で共有して審査を行いました。特に



宮瀬 富之



三審の後に各審査員より、この作品はぜひ推薦したいと思われれるものがあれば、理由を述べ推薦する形式を採用しました。全審査員合意の上、三科はそういう方法を行いました。

その時に、外部審査員の方が、日展でもこのような作品が通るのかと、非常にいいことをおっしゃっていたら、大変外部審査員の方々にお褒めをいただいたと思っております。

それから、これは彫刻に限らず、どこも一緒だと思いますが、彫刻では、一〇〇年以上続く伝統、し

かしその伝統の中にさらに現代を取り入れていくというような方法で審査を行ったわけですが、それが今年の審査の概要になります。

司会 ありがとうございます。
続きまして、四科の春山先生、お願いいたします。

春山 工芸美術の搬入の件ですが、一月に能登地震がありまして、輪島のほうにも漆の作家が多く、会員の方、四名いらしたのですが、ほとんどの家が全壊に近いんですけれども、三人の方が立派に出品なさってきたことに、まず我々は感動した次第です。

それから、応募数ですが、ここ数年、六〇〇点前後で動いています。増減が一〇点以内の範囲であればいいなと思っております。

一番の問題は、やはり傾向です。平面がどんどん減ってきたことです。前回の十回展に比べて一九点減って、立体が逆に増えてきています。平面の減少は何なのかというところをいろいろ考えております。

審査前に話し合い、華やかな、いわゆる寂しくない展覧会場にしようじゃないか。一室から九室まで充実した展覧会にするためには、やはり入選数を増やす事を視野に、よく見ていいところを探そうというところで、前回比で入選数が三一



点増えています。

ボーダーラインすれすれのところを二日間にわたって何度も見直して、結果、増えたと思っております。その中で、新入選が三六六点でした。新入選というのは原点の数字です。これがなければつながっていかないわけですから、これは非常に喜ばしいことだなと思っております。

工芸美術の課題は、会員も大体二対一で立体のほうが多いです。今後、平面をどうしたらいいのかということだと思っておりますが、今年の作品を見ても、素材的にもミクストメディア、表現的にも目新しい、今まで我々が気がつかないような表現が増えてきています。全ての美術の分野でも確かにそのような傾向があるということが、工芸美術のほうにも少し感じられ

てきたと思っております。

陳列のほうは今年三一点増えたのですが、今まで奥のほうの部屋が若干、平面、立体とも少し希薄になっていました。それはしっかりと最後まで充実できたと思っております。

司会 ありがとうございます。
では、五科、星先生、お願いいたします。

星 応募点数は、昨年より一六〇点減少ということでございました。今年は一八六二点を、最終的には昨年より二点増の一四一四点の入選まで絞り込む大変な作業でした。審査というのは、とにかくいい作品を発掘するというのを審査員一同頭に置いて審査しました。

初入選も一六三点ありましたが、初入選が若い人かどうかというのは疑問で、聞くところによると、九五歳の方が初入選しました。今までずっと築き上げたものが開花したということです。そういう面では、皆さんの努力というものを大変評価したいなと思っております。審査は、最終的には、投票という形で絞り込んで、一一一四点の入選ということになりました。ただ、作品の質というのが、今までよかったところがちょっと悪



くなったりとか、また今までどうかと思うようなところが急になくなってきたりとか、指導ということに対しての重要性というものを痛感します。

今、日展ではガイドラインに沿って、審査員になったら応募作品を指導することができない、それがレベルの低下につながっていくということを感じました。

今、一二・八%の入選率です。それでも若い人でも目指せば通る、ちゃんと努力していれば入れる日展だということを示した審査ができたのかなと思っております。

司会 ありがとうございます。宮田先生、これで一応五科全ての主任の先生からご報告をいただきましたが、これをお聞きになっただけで感じたこと、考えられていること、何かございましたら、お

願いたします。

宮田理事長 それは相当難しい答弁をさせられておるのですが、基本的に、全五科の審査をずっと見るわけにはいきませんでしたけれども、先生方のご努力を拝見させていただきます。

そこで思うのは、それぞれの審査の中で共通していた点が一点ありましたね。どういうことかという、手が挙がる前に、作品がすつと出た時に、私の専門は工芸美術なのですが、それ以外の作品、他の科の作品を見ていると、ああ、これは通るなと思う時に、手がさつと多く挙がるんですね。それが外れないというのがとても私はいれなかったんですね。ああ、先生方は、材質や目的やいろいろなのものが違っていても、「いいもの」という言葉を単純に言ってしまうのは甚だ簡単過ぎるかもしれないが、感動するものがちゃんと作品の中からうかがえる、その時に先生方の手が多く挙がるというあたりが、拝見していてとても小気味よかったですという感じがいたしております。

それから、先生方、本当にお疲れさまでした。もうほろほろになつてやっていたよなね。逆に作品から元気をいただくと同時に、す

ごいオーラに巻き込まれたというぐらいの感じがしたので、今さらながらではございますが、本当にお疲れさまでございました。いい結果になってあらわれているかなという感じがいたしました。

司会 ありがとうございます。少し時間がございますので、先ほどお願いしておきました、来年度以降出品される方々に、これは伝えておきたいというようなこと、もしございましたら、お話ししていただきたいのですが、いかがでしょうか。

春山 作品は日展が受理した時点で作者の手から離れて第三者がそれを扱います。

工芸美術の場合、材質がたくさんあるわけです。特にガラスは一番壊れやすいというイメージを持つておられると思うのですが、そういう素材を使った時には、それは第三者が触るといふことを十分に理解して出品していただきたいなと思います。

それから、作品が自立するということ。その辺の理解もどうかというのが見られますので、出品者の方は、工芸美術として造形とは何かということを十分理解した上で出品していただきたいと思っております。

支えておかないと自立できない作品があつて。

宮田理事長 そうそう、周りに座布団を置かないとね。そんなのがあつたりします。

先生方、いかがですか。

神戸事務局長 主にそういう問題が起きているのは、立体作品、工芸美術と彫刻でしょうね。でも、同じような公募展で、さっき「自立性」という言葉があつたのですが、それを乗り越えている作品も増えてきているということです。それは日展の特性からしてだめなんだと考えるのか、それも可能性としてあり得ると考えるのか。いろいろな展覧会を見ていると、実体的ない、例えばガスを出すような作品も最近増えてきているんですね。でも、日展は日展の伝統の上に立ったものだと、いふことをど



神戸 峰男

こかできつちりと出していくことが必要かもしれない。そういう意味で、今、春山先生のおっしゃったようなことは大切な広報に属することという気もします。

また、書のほうから「指導の大切さ」というお言葉をいただきましたが、昨年は洋画の小灘先生のほうから同じような発言がありました。これも私は大切な要素で、日展の長年の歴史の中で、公募展のありようということでは、大切な方向性かもしれないと思います。すし、毎年、そういう意識が少しずつ盛り上がってきているなという感じもいたします。

宮田理事長 渡辺先生、昨年から一昨年から定かではないのですが、大変お年を召された、もう一〇〇歳に近い先生が出品なさっている作品は、小さかったですよね。高齢で大変ですよ。これは日本画では枠がなくて、洋画には枠があるのですか。

佐藤 洋画でも枠はありません。ですので、小さい作品を出す人もいます。

一般出品者は一〇〇号を出さないといけないという傾向になっていきますから、それを五〇号前後でもいいんだという考えを持っていかない、今は、七〇代ぐらいの



佐藤 哲

人が中心ですから、あと一〇年もたたないうちに本当に描けない人がいっぱい出てくる気がいたします。

宮田理事長 開催要綱はどうなっているのかな。

渡辺 上限はありますけれども、下限はない。日本画の審査の場合でも、初めは大きいものがずつと出てきて、最後は一〇〇号から、かなり小さい作品が出てきます。

ただ、比べると、一〇〇号ぐらいで密度のあるものだったら、入選することはありますけれども、やはり小さい二、三〇号では、比べた時に、よく描いてあるけれどもねとなります。

宮田理事長 ある意味、小さい作品だけでも、これ、入選というのがあったりすると、急に流れが変わるかもしれませんね。

神戸事務局長 それだと思っんですよ。私が先輩に言われた言葉に、出品するのに、大きいか、あるいは小さいか、鋭いか、この三つのどれを選んでいいんだよと言われたことがあって。展覧会の会場に持って行くと、大きいものは大きいなりの迫力につながると思いますし、小さいと、やっぱりそばに寄って注目しますよね。それにさらに鋭さが加われば言うことはないということ、これは審査員の姿勢の問題かもしれないですよ。

渡辺 それは姿勢として大事なことだと思えます。

これは僕の感想ですけども、どこの展示室を見ても、元気な作品がずらっと並んでいます。会員や準会員の作品の前に立つと、少しおとなしく感じてしまうので、それらの作家にはもうひと踏ん張りしてほしいと思います。

司会 ありがとうございます。フリートークで佳境に入ったところで申しわけございませんが、これももちまして前半の部を終了させていただきます。

(休憩)

司会 では、続きまして、後半の部に入らせていただきます。それでは、続きということで、いかがでしょうか。フリートークでお願いたします。

星 先ほど来大きさの問題が出てきていたと思いますが、書は、帖・巻で言う、長いのは四メートルまであるのですが、陳列されるのは四〇センチぐらいです。これも一点なんです。そうすると、日本画の大きさと比べて、四〇センチぐらいしか陳列されないというの、なんか非常に不公平な気がするんですよ。

陳列面積の関係で今回展は壁面が六七八点で、展示ケースは帖・巻、篆刻で四三六点、結局、壁面は規定通りの寸法。ただ、個人で搬入の当日に小さいものを持ってくる人もいます。それも受け付けます。大きさの問題というのは、一律にはいかなかなという気がしません。入選するには、やっぱりそれなりのちゃんとした仕事をしていくかということが基準になります。

春山 今の件で、工芸美術も、上限は決まっていますが、下限は決まっていないです。平面は縦長、横長、斜めあり。これは自由で、いいものが入選する。問題は



立体です。
 立体は、小さな抹茶茶碗、人形、もつと小さい観音様が出てきたり、いろいろあるわけです。
 日常、抹茶茶碗をつくっている作家もいますので、これはいいという評価をしている先生もいらつしゃいます。ただ、入選となると、そこが審査の段階で議論になるわけです。

陳列会場に並べて、違和感なく一つの部屋ができるかということはあるものすごく意識しているわけです。小さい作品もいいものは、立体も平面も入選させています。四

科は制限としては、やはり大きさの上限だということは考えられれます。

宮瀬 彫刻の場合は、もう随分昔ですが、今より作品搬入数が多くその中に裸婦・裸体作品が目立っていて、その時裸体の林立との評論もありました。その後会員等の作品の寸法制限を作り今年は小さい番、翌年は大きい番と決め展示されてきました。時代の流れに沿って、今日では裸体像は以前より少なくなってきました。伝統の中でさらに美しいものを目指して皆さんがやっておられます。これは具象彫刻としての本来の姿、美しいもの、造形的にとでもすれば美しい作品が今並べられています。ですから、小さい作品でもとてもいい作品だったら、ぜひ入選させてあげたいと思います。
 そういうことで、寸法の制限も三年前から自由になりました。出品者数がやや減ってきましたもあり、うまく陳列できるように頑張ったというのが今日に至る経緯です。

特選の選考

司会 それでは、特選の選考の話に移らせていただきます。よろ

しくお願いします。

渡辺 日本画の場合、花鳥、人物、風景と、いろいろな出来事をモチーフにして描くという事、これは毎年変わりますが、今回も同様に多様性に富んだ入選作一五九点から、挙手によって止められた作品を特選候補としました。審査員の基準、判断が異なりますので、いろいろなものが候補となり四〇点ほど残りました。

推薦した方が、推薦の弁を述べたので、その都度、一点一点行きますので、選ぶ側は、技術的なこと、細かい作業を見ます。そうすると、遠くで見た時と印象が違う。いい場合もあれば、悪い場合もある。候補に残す時も、その都度今回は五本以上の挙手が上がった作品を残していく、結果二四点を一堂に集め、次は投票を行います。



渡辺 信喜

その投票で一〇点を選びました。その一〇点はうまくモチーフが、人物、花鳥、風景等、バランスよく選考されていきました。中には今年には抽象画があり、最近では、こういう作品も日展には必要じゃないかということでもそういった若い人の考え方も考慮し、その作品が残し、特選になりました。

宮田理事長 渡辺先生、僕、特選が一〇点並びました時に拝見させていただいたのですが、丸いところに白い線がスッと入っている作品がありましたよね。正直、うれしさとびっくりが交錯していました。

渡辺 本当に。僕ら担当しているでも、そう思う人もいて、「えっ、これが」という感じでした。

宮田理事長 その中でやはり議論があったんじゃないですか。異論という言い方のほうがいいかもしれないですが、既成概念を外すというか、新たな美しさに対してどう評価するかというところに、今回の第一科の特色の一つと言えますね。

佐藤 先程も申しましたが特選の作品は、厳選に厳選を重ね一〇点の秀作を選出しました。「これが特選か？」ということがないように気をつけたつもりです。

彫刻会場



宮瀬 彫刻のほうでございませうが、とにかく出品者数に比例して、特選を六名、厳選という形にいたしました。特選は十点までとしておりますが、とにかく珠玉の作品を選ぼう。何が何でも素晴らしい作品にしか特選はつけないんだ、審査員一同、それを守りながら審査しました。今までなかったテラコッタのいい使い方のもの、あるいは造形性に富んでこんな今まで見たことのないというものや、木彫にしても、原木から切り取ったようなすばらしい作品がありました。今までにないもの、さらに

成熟しきったものの六点、数としては少ないのですが、特選といたしました。

宮田理事長 一昨年も、彫刻は、非常に若い方が特選を取られましたよね。初入選でしたよね。

神戸事務局長 そうでしたね。

宮田理事長 今年もまた、別に初入選とかいうことではなくて、いい作品をといた今の宮瀬先生のお話で、結果的にそういうふうになった、これは大変魅力的な話ですよ。いいものを選ぶ、先ほどの「珠玉の」という言葉、すてきですね。

珠玉の作品、そういうものが入るとというのが日展のよさではないかということ、それは渡辺先生なさっきのお話と同じようなことですね。

佐藤先生のところでも、特選ではないのですが、入選作品のなかで、木版の大胆な作品というものも非常に印象に残ったりしましたし、さあ、春山先生、そういうことを踏まえていかがですか。

春山 工芸美術の場合難しいのは、出品申込書に、自分の種別を選択するところがあります。八つか九つくらい、実はもつとあります。しかも二つ選択していたりとか。そのように非常に種別が複雑ですが、

やはり圧倒的に陶芸が多いです。

特選のお話ですけども、決める時、それぞれの種別選抜でやっているわけじゃない。しかも、その中に平面と立体作品があり、全く複雑になってきています。結果的に、重視するのは、どこかに偏ってはいけないということです。そのためには審査員の構成も含めて審査員を選ぶ段階からやるわけです。これが非常に難しい。

いいものを推薦して結果的にうまくバランスがとれるようにいいものを選ぶということをやっております。

陳列の時に、あえて特選作品と漏れた作品を同列に並べて、作家を奮い立たせるような努力はしています。これはもう一歩だったといったことがわかるように、陳列の工夫でそれを補っているわけです。本当に特選は決めるのが苦しいですね。

宮田理事長 何となくですけども、特選の部屋に、特選ではないけれども、明らかにこれは特選に近いよな、という励みをつくっているような雰囲気、陳列の仕方をなさっている。

あれが僕はすごくいいなと思って。特選の人と特選じゃない人の作品が並んでいる。遜色がないぐ

逢坂恵理子国立新美術館館長来場



らいに、先生がおっしゃっていたように、頑張りのある作品が並んでいる。ということ、やっぱり見る人もそうだし、本人たちも、「よし、それじゃ来年も」という気持ちにさせてくれていたようなことを示唆している。ただ陳列するだけじゃなくて、陳列する中にもいろいろ目的があるわけですよ。それを感じさせてくれる。

春山 特選は最大限一〇点に限られているわけですから。

宮田理事長 そういふ感じがとてもした陳列の仕方だと思えます。星先生はいかがでしょうか。

星 今の陳列のお話は、書も同じです。要するに、特選の部屋には、特選と、特選の候補になった作品も並んでいます。

結果的には、漢字が五点、仮名が三点、調和体一点、篆刻が一点となりましたが、特選を選ぶ際に、一点一点全部、前に並んだ作品について、審査員全員の意見を聞きました。それで大体審査員はみんな同じ方向を見ているなというものを最終的に選びました。

結果的には、一〇〇%というわけにはいきませんが、バランスよく整ったのかなというふうに思っています。

宮田理事長 不思議とあの部屋へ行きますと、緊張しますね。やはりそれだけの作品があるということでしょうね。空間によつて、非常に心が安らぐ部屋と、すごく緊張する部屋があつて、とても日展のよさというのを感じさせてもられますね。

五科の作品の中で、美の森林浴ができていく感じがします。そこに時々生きた鹿がいてくれたり、きれいな落ち葉が落ちていたり、清水が流れていたり、その時、ふと足をとめるような感じがするので、五科をざーっと見て回ると、違ひのよさというんですか、それを感じ



日本画会場

じますね。

星 特選を見れば、審査員も問われるという感じがしますよね。

宮田理事長 おっしゃるとおりですね。

星 その辺をしっかりと見るといふことが、今後、若い人たちが目指す良いきっかけになってくれればなどと思いますね。

審査員にもいろいろ主張がありますから、それで拾い出したり何かして、その繰り返しで七審まで続き、最後は、決着つかないの、投票という形になりますね。

非常に大変で、会場に陳列され

ている作品が目には焼きついていきますよ。作品ばかり見ておりますので、みんな印象に残っています。

宮瀬 ちょっと言葉が足りないか、申しわけございません、一つ付け加えさせていただきます。

彫刻の場合は、特選六名でございませうが、結果的には、女性が圧倒的で、四名の方が特選でした。

それから、特選になぜ選んだのか、その理由を各審査員に聞きました。そのご報告がちょっと漏れていました。

佐藤 私も一つ、特選の選考の話とは少し離れますが、若い人への対応について考える必要があるかと思ひます。

応募規定の見直しも含めて、若い人が出品しやすくなるような環境の整備を、洋画として検討してゆきたいと思ひます。

司会 なかなか充実した後半になりましたが、神戸先生、できたら前半後半全部まとめて、「第十一回日展審査を終えて」というテーマでお願いいたします。

神戸事務局長 わかりましたが、宮田理事長はもう少し話しておきたいことがあると、どうも眉間のあたりを書いてありますので、将来こんな方向があるといいねとい

う方向をちょっとお話しただいで、その後に、私、少しまとめさせていただくということでしょうか。

宮田理事長 ありがとうございます。

私、たまたま昨年も今年も審査の状況と授賞式、そしてパーティーと拝見させてもらつて、お客様の数は少し昨年度よりも少ないですが、有料入場者は増えていゝるんです。このような傾向は、多分、ほかの団体でそんなにあるかなというのを考えると、やはり日展の持つ意義というのはとても大事なものだと思ひましたね。

それから、先ほど指導者の話も出ましたけれども、具体の指導ではなくて、今は作品をお見せして、そこから感動を得るものとなつておりますので、今度はそれをどう吸収して次につなげていくかというのを課題として考えなければいけないのかな。そうすれば、数の上下は別としても、作品の質は必ず上がると私は自負していますので、そのあたりが実はこれから問題かなという感じがしています。

さつき休憩の時に宮瀬先生とお話して、数は少なくなりましたけれどもというお話の中で、宮瀬



先生から「兵馬俑じゃないんだよね」、これ、結構鋭い言葉だなと思っただけです。そこが逆にとても魅力的な作品になっています。日展に対して目いっぱい自分の情熱をぶつけるという姿勢を私どもが見せるということが、やっぱり次に回していきえるのかなと思って。同じように、ちゃんと時代をつかんでいる表現をしているというの、新しい彫刻の世界なのかなという感じがいたします。渡辺先生、佐藤先生、春山先生、星先生もそうですけれども、皆さん、本当に……。例えば星先生の

ところの団体の書作品を見ると、星先生のあの壁面いっぱい作品は、日展に持ってこられませんか。でも、小さくしてもちゃんと星先生であるというのがわかるという、その両面をお見せするじゃないですか。そういうところが日展のおもしろさじゃないかななんて感じがしています。

佐藤先生にしてもそうです。先生の会に伺った際に、会場で先生の制作風景の動画を見た時に、乱暴に描いているのかと思ったら、そうじゃなくて、すごく繊細に。筆を動かすよりも、ペインティングナイフの動きのほうが遅かったですよね。遅かったというよりも慎重でしたよね。こういう慎重さででき上がってくる作品との違いみたいなものがあるんだな。そういう作家の生きざまをもっともつと会場の中でお見せするようなことがあると、へえーっ、日展ですごいねとなるのかな、そんな感じがいたしました。先生方の作品の寸評をしたみたいで申しわけないのですが、それぞれの先生方のすばらしさというものに出会った時に、いや、大変なものだなということを感じて、それをお見せする環境みたいなものをその後整えるといいかなと。

例えば、工芸美術の場合、春山先生、種別の違いとか、表現の違いを出していましたよね。ああいうのも新しい試みで、よく理解してもらえるところになっているのかなあと感じました。

神戸事務局長 宮田理事長のお言葉で今日の総括が済んだような気がいたします。ここで蛇足をする必要はないと思いますが、日展というのは団体展です。発表の場ということだけであれば、自由な雰囲気の中で幾らでもやっていただければいい。でも、日展という公募展で、何千という作品の中に一点出すことよって自分を主張していこう、そういう気概を持って出品し勝負していただけるような広報を我々はしなければいけない。そしてニュースを発信していかなければいけないということに改めて感じました。

日展の伝統と品格を楽しみ、またそれに参加したいと願う人を迎えられる。さらには我々が新たなものを受け入れる懐を持つということが大切なと思います。今回は全体をお聞かせいただいたり、非常に各々が努力していらっしやることもよくわかりました。ここでさらにもう一步突き詰め、その方向で見ていただけたら、団

体展消滅、斜陽だなんて言わせないものが生まれるのではないかと、期待をいたします。

本日にありがとうございます。司会 本日は、お忙しい中、この座談会にご出席いただきまして、心より感謝申し上げます。長時間になりましたが、これをもって、今年の座談会を終了させていただきます。ありがとうございます。



司会 福光 幽石

(おわり)

令和6年11月15日 (金)
於 国立新美術館 地下一階
審査室D

外部審査員より

次世代へと受けつがれゆくもの

(第一科 日本画 富山県水墨美術館長) 若松 基

第十一回日展の開催にあたり、建島哲氏とともに外部審査員として日本画の応募作を拝見した。前例にとらわれず最善の方法をその都度でいねいに話し合う、公正で真摯な審査の進め方には、いたく感銘を受けた。

外部審査員ということではじめは「尖った」視点を念頭に審査に加わったが、今回の審査員諸氏からは日本画に多様性を求める意欲が強く感じられ、それで最後には逆に、穏健であっても技術的にしつかりした作品をひそかに応援する意識で応募作と向き合っていた。惜しくも特選を逃したような中にそうした佳作が数多くあり、また審査外では三賞審査の日に拝見した準会員・会員クラスの作品なども見ごたえがあつて、「さすがは日展」という技術水準の厚みは健在だった。

当館では来秋、豊かな個性が開いた明治三十〜四十年代(文展創設前後)の日本画に注目した企画展を準備しているが、以後もずっと、革新への志向と技術の重視という両極の散らすパークが、近代日本画を駆動し続けてきた。そして新しい日本画を生み出そうとする勇気を支えたものは常に、鍛え抜かれた画技の裏付けであった。

戦後の日本画をけん引した巨星たちがいた時代に日展で作家として歩みだした世代が、現在の第一科をリードしておられる。「偉大な先人に比べれば」との思いもあつてか、どなたも謙虚で親しみ深く、次世代の可能性の芽を大切にされる誠意がひしひしと感じられた。それは素晴らしいことであり権威的になる必要はないが、伝統ある展覧会を担っていく誇りは若い人たちに伝えていかねばなるまい。その重みが、一人一人の「日本画とは何か?」という問いをより深いものにしていくてくれることを期待する。

若松 基 (わかまつ もと) 一九六四年、大阪府生まれ。愛知県立芸術大学美術学部卒業。富山県立近代美術館普及課長、富山県美術館普及課長、富山県水墨美術館学芸課長、同副館長を経て、現在、富山県水墨美術館長。



若松 基 (わかまつ もと) 一九六四年、大阪府生まれ。愛知県立芸術大学美術学部卒業。富山県立近代美術館普及課長、富山県美術館普及課長、富山県水墨美術館学芸課長、同副館長を経て、現在、富山県水墨美術館長。

日展第二科洋画の審査を終えて

(第二科 洋画 森の美術館長) 森 忠行

日展の外部審査員を初めて務めさせていただきました。応募作品一三七五点を五日間でしかも限られた時間で判断をする極めて過酷な審査でした。

作品は、作家の人生の足跡であり、自の生き方の表現ではないかと思ひます。作品と対峙した時、どれだけ心に響くのか作品と会話をしている感覚でした。作品の問いにどれだけ応えられたか不安もありましたが自信を持って審査を続けました。一次二次三次と審査が進む中で画力、個性、色彩など優れた作品を選挙として選ぶことができたのではないかと思います。

特選の審査は大変難しい選定でした。私自身、様々な公募展を見る中に個性的で主張が明確な作品に出会うことがあります。特選は今後活躍を期待される若い作家や見る物に余韻や想像を引き起こす作品、心地よいリズム感と品性のある作品など、様々な才能を持った作品を選定することができました。

文部科学大臣賞、東京都知事賞、日展会員賞は外部審査員として、率直な意見を述べる機会もあり、時代に左右されることなく次代に繋ぐ作品を選定することができました。

近年、公募展の出品数が減少し、日展の洋画も前年比八八点六%の減少となりました。SNの発展により絵画団体に属さず活動する作家の出現にどう日展の存在意義と魅力を伝えて行くのか課題と思ひます。文化芸術は人々が生きて行く上で必須のものです。特に、小さい時から美術作品に触れる機会を作る必要を感じています。



森 忠行 (もり ただゆき) 一九四八年、埼玉県生まれ。三郷市議会議員四期。現在、森の美術館長。

第十一回日展第三科（彫刻）の審査雑感

（第三科彫刻 美術評論家） 太田垣 實

日展第三科（彫刻）は明治四十年の文展創設以来、我が国近代彫刻のメインストリームを歩み、具象彫刻の歴史と伝統を築き上げた。戦後、欧米の彫刻表現が隆盛を見せ、抽象彫刻やキネティックアート、インスタレーションなど現代彫刻表現が拡散、多様化をみせるなかでも、日展彫刻は具象彫刻表現の些くしての誇りと存在感を示してきた。

私が新聞社の美術記者としてアートシーンを取材、論評活動を始めたころは、抽象彫刻をはじめとする現代立体表現の革新的な熱気に比べて日展彫刻の会場は裸婦や人体など具象表現がほとんどであり、歴史と伝統によりかかる守旧的な在り方に批判的な批評を書いたものだが、今回、初めて日展彫刻部門の外部審査員を経験して、ポストモダン以降、ますます多様な変遷をみせてきた空間表現の動向にあっても、なお厳然として具象彫刻の雄としての勢力を保持してきた日展彫刻の歴史と伝統の重みを再認識した次第である。

一般公募の入選・落選の審査、特選を決定する審査は公正かつ誠実に行われた。特選の数も応募点数から六点に減らし厳選となった。審査員各自が一推しの作品について推薦の弁を述べ、そのあと票入れを何度か繰り返して、決定した。入・落選も、落選になっていった作品ももう一度みなおし、現代のフィギュアやキャラクター的な要素を入れたものや、これまでの日展彫塑にない制作、近年の若い世代の趣向を反映した作品などを救い上げた例もあった。

伝統的な日展彫塑からは異質と思えるものまで受け入れようとする姿勢の一端を垣間見る思いがし、そうした受容の度量と新しい傾向をも取り込む懐の深さが、日展彫刻を少しずつ現代的な装いに変えていく漸進的姿勢につながっていると実感した。

日展審査

（第四科工芸美術 豊田市美術館長） 高橋 秀治

これまでの外部審査員も報告されていたが、審査を適正に行うため個別会話禁止、スマホ・メモ等持込み禁止、席のくじ引き等が徹底されており、作品そのものの勝負が行われた場であることを伝えたいと感じた。外部審査員として参加する中で、どういった視点で作品を見るかを考えたとき、課題としたのは、日展工芸の幅の広さ、柔軟性と多様性を意識しながら、またこれからの日展の目指す方向にも、多様な表現を受け入れる懐の深さのようなものを見出せないかと考えた。一方工芸美術は、基礎としての技術の熟練度を度外視にはできない。その上で素材を生かしてどう表現に結び付けているのか、といった視点で審査に臨んだ。最終的に外部審査員の一言で決まるわけではないが、特に特選を決定する段階では、単なる評決だけで決するのではなく、それぞれの作品についての意見表明と評決を重ねて行うことで、作品のより深い理解の上で決定へと進める丁寧な審査が行われたことも報告したい。意見交換では次代の作家を育てたいという想いからの意見が記憶に残った。出品点数は五九二点で昨年より若干減じたとのことであるが、この傾向は各公募展や地方の県展などでも同様で、人口減少の日本の姿の反映でもあり、単に数を問題とするより、質的にどうかを意識することが必要であろう。点数が減じても質的に優れた作品数が減じていないれば会派としての力は減じない。最後に蛇足ながら、今後の課題の一つは審査員の男女比である。男性中心の審査は無意識に多様性を失う可能性もあるだろう。また作者の想いばかりが先行していると思われる作品名が案外多くあり、それぞれの制作者に一考していただきたいと感じたことを申し添えたい。



太田垣 實（おおたがき まこと）

一九四七年、兵庫県生まれ。大阪外国語大学（現 大阪大学 外国語学部）卒業。京都新聞社美術担当編集委員・論説委員を経て大阪成蹊大学芸術学部教授。京都市美術館評議員、京都芸術センター運営副委員長などを歴任。現在、美術評論家連盟会員、公益財団法人中信美術奨励基金理事。著書に『京都美術の新・古・今』（淡交社）、共著に『美術家の墓碑』『富岡鉄斎』（京都新聞社）ほか。



高橋秀治（たかはし しゅうじ）

一九五五年、岐阜県生まれ。岐阜大学教育学部美術工芸学科卒業。岐阜県美術館開館準備に携わり開館後同館学芸員、愛知県美術館開館準備に携わり開館後同館学芸員、同館副館長、岐阜県現代陶芸美術館長を経て、現在、豊田市美術館長。

日展第五科（書）審査所感

（第五科書 九州国立博物館長） 富田 淳

令和六年、第十一回となる日展の審査は、まず九月三十日に上野精養軒において総会が開催され、宮田亮平理事長の挨拶に続いて、審査員の紹介や行動基準（ガイドライン）等が説明された。

第五科（書）の審査は、主任を務められた星弘道先生をはじめとする審査員十七名に加えて、恵美千鶴子氏と私が外部審査員として参画、十月十日から十八日まで、池袋のサンシャインシティにおいて行われた。審査が九日間に及ぶのは、書の応募数が八六六二点の多きにのぼるためである。去年より一六〇点ほど減少したものの、入選はわずか一一四点、入選率は約十三%の狭き門である。

篆刻と調和体は全員が審査にあたり、応募数の多い漢字と仮名は、二班に分かれて同時に進められた。審査員の前に作品を運ぶ作業員の方々は実に段取りが良く、プロに徹した無駄のない所作には、いつも感心させられる。作品は入選、入選候補、落選に振り分け、落選を除いた作品を、所定数になるまで幾度も絞り込む。応募数の多さから、審査員にとっては苦行のような日々が続くが、審査そのものは、公平・公正で考え抜かれた方式であると思う。

部門ごとの審査を終えると、積文を点検する。書が文学に従属するかどうかは、個々人の立ち位置によって意見が分かれるところであろうが、今回も入選しながら、誤字のためにやむなく差し替えとなった作が出たのは、返す返すも残念であった。最終日に特選を選び、三十一日に国立新美術館で、陳列された作品の中から大臣賞等を選考した。

生成AI等の科学技術が広く普及する現代の日本において、古来の伝統を受け継ぐ書が盛行している現況は、まことに慶賀に堪えない。皆様の益々のご健筆を、心より祈念する次第である。



富田 淳（とみた じゅん）

富田 淳（とみた じゅん）
一九六〇年、茨城県生まれ。筑波大学大学院芸術学研究所博士課程単位取得退学。東京国立博物館学芸研究部長、同館学芸企画部長、九州国立博物館副館長を経て、現在、九州国立博物館長。

文化功労者

高木聖雨

日本芸術院会員・日展理事・大東文化大学名誉教授・全国書美術振興会理事長・読売書法会最高顧問・謙慎書道会理事長



昭和二十四年九月八日岡山県生まれ。昭和四十九年第六回日展初入選、平成元年第二十一回日展特選、同五年第二十五回日展特選、同十八年第三十八回日展会員賞、同二十七年改組新第二回日展文部科学大臣賞、同二十九年恩賜賞・日本芸術院賞、令和二年日本芸術院会員。

叙勲

令和六年十一月

旭日中綬章 福田 千恵（日展理事）

旭日小綬章 石飛 博光（日展会員）

第十一回日展イベントレポート

※今年もたくさんの方が参加してくださいました。この様子はHPでご覧いただけます。

『講演会 シンポジウム・映像による作品解説等』
『三二解説会』

『らくらく鑑賞会』
『グループ解説』—スクールプログラム—
『触れる鑑賞』プロジェクト

『わくわくワークショップ』
二十三年目を迎えた『わくわくワークショップ』。

会期中、日曜日の三日間、午前・午後の全六回で、定員を超える応募をいただきました。指導作家が子供達のために考えたプログラムを体験し、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。この様子はHPでご覧いただけます。



『わくわくワークショップ』の様子

『手紙を書こう！』

『わくわくワークショップ』の鑑賞カードから発展した、『手紙を書こう！』では、五回目の今年も三九四通のお手紙をいただきました。昨年手紙のやり取りをした作家の作品を見るために来場し、その感想をポストに入れる参加者も年々増えていきます。若い鑑賞者と作家、作品を『手紙』が見つないでくれました。今後『日展だからできる』普及事業を展開してまいります。

大臣賞受賞作品制作意図

東京都知事賞受賞作品制作意図

日展会員賞受賞作品制作意図

文部科学大臣賞 第一科（日本画）

能島 浜江「樹の一本は二つの木」



一昨年からの作品と合わせ三部作のつもりで、宮沢賢治の自然観と人を感じて詩を選び制作しました。針金で作ったおはなしメガネ、マウンテンハットを装着、今回は樹になりきったポーズをモデル（妹）にしてみました。日展に憧れ、育てていただき、今に至ります。賞の重さで感謝を持ち、今後も賢治の世界を描きたいと思っております。

東京都知事賞 第一科（日本画）

手塚 恒治「五月の風に」



アンスリウムを花瓶にさし、母のカップに紅茶を入れる……。母が他界して十一年目の五月が過ぎていく。かすかな風が通りすぎる。その時、過ぎ去った日々の記憶が、よみかえる。今後はさらに、テーマや表現技術を、より良く展開してゆきたい。

日展会員賞 第一科（日本画）

佐藤和歌子「ソロモンの指環」



旧約聖書のソロモン王は正しく善悪を判断する心を持ち、動物と会話が出来る十の指輪を持っていたという伝承を題材に、言葉を持たないものたちの声を聞き真実を正しく見る目を持つ大切さ、難しさを人物と動物の姿を通して表現できたらと思制作しました。

文部科学大臣賞 第二科（洋画）

寺久保文宣「ECHO―裸婦と猫―」



画面の奥に光あれ！最強の色彩を響かせつつ自然であれ！この、絵画としてかなり難しくスリリングな課題に挑戦し続けながら、未だ満足感はずしくあります。少しばかり手こたえを得たところですが、まだまだ任重くして道遠きことと思っております。

東京都知事賞 第二科（洋画）

田中 里奈「人生設計」



誰もが描くであろう人生設計を私なりの解釈で前向きに明るく表現してみた。立ちほだかる壁、未来を指差す自分、輪投げのごとく上手くいったり、外れたり。設計図を描くように完成が見えないのが人生設計。版木に思いを込め自分の人生をどう進んでいくのか、不安半分楽しき半分。

日展会員賞 第二科（洋画）

西田 伸一「9月・なごり」



明るく眩しい夏が過ぎ、心落ち着き、物思いに耽る秋を迎えようとしている。季節の移ろいの中、同じ様に自身の人生を重ねる若い女性の姿を描きたいと筆を取りました。並行し、構図・構成に注力し、作品の完成近くまで画面上での調整に時間をさきました。

内閣総理大臣賞

第三科 (彫刻)

上田 久利「風のおとー朗しー」



今、時代の風は明るい方向には向っていないが、よきおとずれの「朗し」を求めているタイトルである。
女性の坐像を正面から三角形の構図とし、頭からつま先までの弧の連続が作るリズム、動勢を意識した。着色は石膏の白色のことが多いが、輝く未来を信じて金彩とした。

内閣総理大臣賞

第四科 (工芸美術)

武腰 一憲「月の器・帰路」



本作はシルクロードに点在するオアシス都市を旅した時、砂漠に囲まれた農村の宿での夕食後、外に出ると点灯もないのに月明りだけでとても明るく、日本では感じたことがない月の大きさに感動し、この世界を九谷焼の技法で自分の心象風景として表現してみようと制作しました。

内閣総理大臣賞

第五科 (書)

田中 徹夫「花の姿」



新勅撰和歌集より藤原俊成の春の歌を選びました。峰々の壮大な景色を思い、スケールの大きい余白の美しい作品を願い書作いたしました。山場の立体感を出す為、前半三行目の「多遠」後半六行目の「要求ぬ」のカスレの筆圧・速度に特に気を付けました。

東京都知事賞

第三科 (彫刻)

青山 三郎「時の流れに」



ここ最近、動きのある作品を作っていました。一度原点に帰って自分を見つめ直したく、静かにたえずむ女性像を木彫で作りました。何気ないポーズがこんなにもむずかしく、そして自分の力の無さを思い知らされました。平穩無事な日常がいかに大切であるかを、表現しなかった。

東京都知事賞

第四科 (工芸美術)

叶 道夫「黎紅」



自然の美しい事象を、焼き物独特の素材を用い、作品を制作する事を心掛けています。
昨今の地球温暖化現象の中、柘榴の実が少し遅れています。夜明け前の木々の緑、実の赤い表面に現れた光と影の美しい景を、三種類の釉薬を重ね掛ける事で表現しました。

東京都知事賞

第五科 (書)

歳森 芳樹「袁凱詩」



行草書を持つ自在な表現に感銘を受け取り組んできました。三行が互いに響き合いながら変化に富んだ表情で立体感のある作となるように心掛けました。強い線と意識しすぎたか硬さの目立つ作となり自在な表現にはまだまだ届きません。今後は課題を意識し克服に努めてまいります。

日展会員賞

第三科 (彫刻)

寺山 三佳「空」



いつも断片的な思い付きから制作が始まります。雲を見上げていたら「空」を作ってみたいと思いました。空は目で見ることはできませんが、形はあります。作りたいものを形にすることが、私の永遠の課題に思えたりしません。十分な時間をかけて挑戦したいと思います。

日展会員賞

第四科 (工芸美術)

横山喜八郎「沼の水中木」



青森の葛沼に魅せられ数年、「水中木」を表現した。題材を決定した時点で制作の始まりである。現地に向う過程が創作の原点である。綿密スケッチを基に心象表現に移行し下図構成を進めていく。自然と抽象の狭間の中で古木の強さを表現することを意識しながら単彩により深く表現創作を続ける。

日展会員賞

第五科 (書)

岡野 楠亭「重雍襲熙」



西周金文特有の性霊的で神秘的なフォルムの字形を今作の題材とし、制作に取り組みました。「重・熙」を静、「雍・襲」を動の構成とし、印全局に変化と躍動感を与えました。また刀法においては青銅器に鑄造された温かみのある線状を主眼に線の立体感を追求してみました。



(日本画) 熊 崎 敦 士

今回の作品は、東山動物園へ訪れた際に水の中を漂っていたナイルワニを描きました。原始の姿そのままかと思われた、その逞しさと鎧のような鱗から感じる強靭さが伝われば良いと思い制作しました。この度の入選は、次の制作に細心さを引き起こす貴重なプレッシャーになり、煩雑とする今後の人生の中で確かな励みを生む事象にもなりました。今回の結果、技力の踏襲に留まらず制作を続けていきます。



(日本画) 坂 井 優 子

深夜のリビングから微かに聞こえる楽しそうな話し声。友人と旅の計画を立てる息子の姿をそつと切り取りました。夜の静けさと、そこに漂う温かな時間を描きたいと思いました。子育てが一段落して始めた日本画で日展に出品するなど考えてもいませんでしたが、多くの方々に背中を押していただき出品を決意しました。思い切って挑戦したことは大変良い経験になりました。この入選を励みに、これから制作を続けていきたいと思っています。



(日本画) 安 井 雪 乃

私は現在、日常や建物に宿る時間の流れや人の気配をテーマに制作しています。今回、一五〇号という大作に挑み、大学卒業後新しい環境での制作に不安もありましたが、悩みながら制作した時間は自分にとって大きな経験になりました。その結果、高校生の頃から憧れていた日展に入選することができ、とても嬉しく思っています。今後も挑戦を続けながら、自分の表現をさらに深めていきたいと思っています。



(洋画) 大 谷 充 秀

今は亡き父も、日展に作品を出していたのを見ており、自分も絵を描くなら日展に出品したいと、思っていました。今回その思いが叶い、初めての挑戦で初入選する事が出来大変嬉しく思っています。ご支援ご指導いただいた方々には、心より感謝申し上げます。今後も自分なりの絵を描く事ができるよう、努力してまいりたいと思っています。



(洋画) 福 田 光 太 郎

地元の美術館の壁に、巨大な猫の絵が掛かっている夢を見た。未熟な人間のせいで命を落とし、たった今までそこにいた猫の絵である。それから、実際に、猫を描いた。描けば戻って来るかもしれないと念じて、描いた。良き師に巡り合い、友を得、そして、動物たちの最前列に座を占める猫の絵が、地元ではなく東京の中心で飾られているのを見た。夢ではなかった。まだ生きていそうな我が飼猫も喜んでるようにと心から願っている。



(洋画) 吉 森 輝 美

今回の作品は、ひまわりで連想したウクライナ。希望があり楽しい日常を無残にも破壊する戦争。早く終結してほしいと願って描きました。ご指導いただいた先生方、三十二年間、互いに励ましあってきた絵の仲間感謝申し上げます。憧れの日展より初入選の知らせが届いて以降、恩師の「生き様が絵に表われる」との言葉を思い出し、身の引き締まる日々を過ごしています。



(彫刻) 白垣 幸也

大学院に入り彫刻を始めて、今回の日展で初入選という素晴らしい結果をいただきました。この事は独力で決して成し遂げることはできず、多くの方からのご指導をいただき、やっと掴むことができたものであると感じております。
今回の作品は、人体の構造を、塊の組み立てで捉え、それぞれの寸法を明確に、立像として構築するという形で制作を進めました。
この入選に浮き足立つことなく、今後に繋げていきたいと思えます。



(彫刻) 園田 陽菜

大学で彫塑に出会い、日々新しい学びや発見を楽しみながら制作しております。今回の作品は「自分を大切にすること」をテーマに初めて制作した全身像です。納得のいくまで粘土を触り続けて、形にするまでに一年かかりました。制作のなかで支えてくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。今後より良い作品が作れるよう、自分の納得のいくまで突き詰めて制作を続けていきたいです。



(彫刻) 宅間 紗矢

私は作品を作る時の楽しい思いが見た人にも伝わるような作品にすることを心がけています。
大学院に進学し新たな環境での制作は同期や先生方からたくさん影響を受け、作品にかける時間や想いも日に日に増えていきました。
今回日展に初入選することができ、大変嬉しく思います。
これからも楽しい制作活動を続け、自分の成長に繋げていきたいです。



(工芸美術) 谷口 倫都

二〇一〇年から竹芸と出会い、自分らしい表現を求めて試行錯誤し、時には竹芸以外の経験も必要だと考え、いろいろ実践してきた日々でした。
今回、初入選することができました。日展への出展は憧れであり、一つの目標でした。竹の美しさと自分の表現したい世界観をより多くの人に鑑賞していただきたいと、今一度気持ちを新たに精進して参りたいと思えます。



(工芸美術) 南雲 龍生

焼き物を家業とする家に生まれたため幼少の頃から祖父母、両親が仕事場で制作をしている時には必ず兄と一緒に私達も作業台の片隅で粘土をいじっていました。特に誰から教わるという事もなく見様見真似で手捻りや電動ロクロで次第に大きい物も作る様になり、兄が高三で憧れの日展に初入選を果たし私もいつかと頑張ってきました。高二で入選できたことは、様々な環境に支えられてきたおかげと感謝しています。



(工芸美術) 大和 宏

この度は日展に初入選することができました。会場に展示された自分の作品と向き合った時、言葉にならない緊張感に身が引き締まる思いでした。と同時にお世話になった諸先輩方に心の底から感謝の気持ちがおこみ上げてきました。
ここが作陶を始めた時に定めた陶芸家としてのスタート地点。やっと立つことが出来ました。次の目標も定まりました。これからも日々精進し日展の名に恥じない作品を制作して行きます。



(書) 荒金 和佳子

新入選の一報に、師である父も天国で喜んでくれていることと思います。作品は「邂逅から生まれた厳たる師の轍を受け、真っ白な明日を自ら切り拓いていく」ことを誓ったものです。行間の響きを意識して線の角度に変化をつけるなど幾つものパターンを思考し制作にあたりました。踏み出す姿を表現したく、筆を紙面に刻み込むように運筆しました。より一層書の学びを深め精進してまいります。



(書) 出射 早希

私にとって日展入選は憧れであり最大の目標の一つでした。そんな目標の一つが叶いましたこと大変嬉しく光栄に存じます。また、ご指導ご教授いただいた先生を始め、陰ながら応援し支えてくれる家族、仲間にも恵まれたこと心より感謝しております。今回の作品は、明清時代の行書体を基調とし線のリズムや力強さを意識して取り組みました。これからもご縁と恵まれた環境に感謝し、一層努力を重ねて参ります。



(書) 酒井 宗舟

毎年会場で見える先生方の作品に圧倒されておりました。伝統ある憧れの日展に入選できましたことはひとえに諸先生、先輩方のおかげと感謝の念に堪えません。古典の学びを通して、隷書特有の躍動感のある線の表現に努めました。課題も見つかり、隷書の奥深さを再確認いたしました。これからも、書表現を極めるべく、日々研鑽を積んで参りたいと存じます。



(書) 兵藤 稜典

日展という歴史ある展覧会で、私の作品を選んでいただけた事に、喜びと責任の重さを痛感しております。今は只々感謝の気持ちでいっぱいです。作品を制作する上で、余白を意識的に広く取りながら文字集団との調和を図り、白の美に重きを置いて、作品が明るく、温かく、そして強さが内蔵するように心掛けました。究極は、屈託のない格調高い書の世界が表現出来るよう、より一層尽力して参りたいと思っております。



(書) 深堀 美郷

日展に入選すること。それは学生の頃からの夢でした。この度その夢を叶えることができ大変嬉しく光栄に存じます。初入選の吉報をいただいた時、ご指導くださった先生、支えてくれた家族、様々な方の顔が浮かびました。制作にあたり、優しさや強さ、相反する要素を感じるものにとり組みました。今後は、自分自身のためだけでなく故郷福岡での書の啓蒙普及に携われるよう、恩返しのご気持ちで研鑽に努めて参ります。



(書) 渡邊 啓太

日展初入選、喜びとともに誠に身の引き締まる思いです。ご指導くださる先生や、支えてくださる周りの方々に感謝申し上げます。今作の朱文は、甲骨文を用いて象形性を生かし、空きを設けて明るさを求めました。篆書のもつ魅力にワクワクさせられる日々ですが、方寸の中で古代文字を生き生きと活躍させるのは至難の業で、苦戦の日々でもあります。文字学や書学、刀法を磨くべく日々ひたむきに取り組んでいきます。

第11回日展 応募点数及び陳列点数

(新入選数は入選数を含む)

	日本画	洋画	彫刻	工芸美術	書	合計
応募点数 (前年度比)	335 (-8)	1,375 (-88)	83 (-12)	592 (-13)	8,662 (-160)	11,047 (-281)
入選点数 (新入選数)	159 (16)	539 (49)	58 (10)	465 (36)	1,114 (163)	2,335 (274)
無鑑査点数	133	120	140	112	143	648
陳列点数	292	659	198	576	1,257	2,982

第11回日展 入場者数 (国立新美術館)

月日	曜日	天候	入場者数(人)	月日	曜日	天候	入場者数(人)	月日	曜日	天候	入場者数(人)
10/31	木	曇	3,277	11/9	土	晴	3,331	11/18	月	雨のち曇	4,136
11/1	金	晴	5,149	11/10	日	曇	3,693	11/19	火		休館日
11/2	土	雨	2,994	11/11	月	曇のち晴	2,904	11/20	水	雨	3,482
11/3	日・祝	晴	3,348	11/12	火		休館日	11/21	木	雨のち晴	3,661
11/4	月・祭	晴	2,959	11/13	水	晴	3,739	11/22	金	晴	4,307
11/5	火		休館日	11/14	木	曇	3,998	11/23	土・祝	晴	6,514
11/6	水	曇	2,277	11/15	金	雨のち曇	3,172	11/24	日	晴	5,359
11/7	木	晴	2,402	11/16	土	曇のち雨	4,375	入場者数82,485名(平均3,749名) ※10/31は出陳者内覧会			
11/8	金	晴	2,328	11/17	日	曇時々晴	5,080				

●個人

賛助会員制度《日展パートナーズ》
(掲載希望者のみ 令和6年1月15日現在)

青木晃子様 東晋一郎様
新井演子様 飯田真未様
石崎國夫様 井谷善恵様
井上道守様 今田功一様
今村忠司様 岩田薫様
梅澤真那様 奥田節子様
角井博様 梶山純子様
兼重勇希様 菊池和久様
栗原直子様 呉祐輔様
黒田浩平様 児玉安司様
近藤禎男様 坂本美賀子様
佐川かおる様 佐藤大悟様
澤井和行様 高木和美様
高木寛史様 田頭益美様
高橋千笑様 竹尾明子様
竹本葉子様 田中宏欣様
土屋礼央様 寺岡宏高様
中室里恵様 西田俊通様
西村潤帰様 西村友子様
野田裕一様 藤田理恵子様
藤本真之様 堀稲子様
宮島幸男様 村里暁様
森寫順子様 吉見次郎様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
株式会社 大垣共立銀行様
岡崎信用金庫様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
一般社団法人 光風会様
公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 タカラクリエイト様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 千葉銀行様
株式会社 筑波銀行様
T&Tパートナーズ法律事務所様
一般社団法人 東光会様
東洋額装株式会社様
株式会社 西文明堂様
公益社団法人 日本書芸院様
ニューカラー写真印刷株式会社様
株式会社 原汲古堂様
一般財団法人 ビオトピア財団様
福井素鳳堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
菱三印刷株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

教えて、作家さん！
わくわくワークショップ
「手紙を書こう！」

木の机、椅子という今ではあまり見かけない部屋である上に、紙飛行機の黄・青がすごく目立って見えた。小か中学校の教室であることはすぐによく分かった。青という全体的な色から寂しさを感じる。題名から考えるにこの教室はもう使われていないのではないかと考えさせられ、また紙飛行機はいつからあるのだろうと考えてしまう。面白かった。

どうゆう状態の教室を題材として描いたのか知りたい。全体に青みがかっていて、切なさのような寂しさのような物が感じられた。どんな経緯でこの作品を思いついたのか、どんな感情が込められているのか。とても面白かったと色々考えさせられました。

遥之さん 13歳

私の作品に目をとめてくれ、丁寧な感想まで有難うございました。私は岡山に住んでいます。明治時代に建てられた小学校へ行き、そこの教室を参考に描きました。私は古いもの、すたれたものにひかれ、題材としてよく選ぶのですが、机や椅子も昔ながらの木目に温かさを感じ、そこを描きたいと思いました。廃校になった教室に寂しさと同時に懐かしさも感じ、それを表現する為にブルーの寒色を用いましたが私の好きな色でもあります。紙飛行機は昔と今をつなぐものとして年月の移り変わり、時間の経過を表す意味でポイントとして最後に入れました。私の作品から、見る人が自分なりの物語を感じとってもらえれば嬉しいです、表現したかったことが遥之さんに伝わったことがとても嬉しく、今後の制作の励みにもなりました。

石井和江



(日本画) 石井和江 <時の行方>

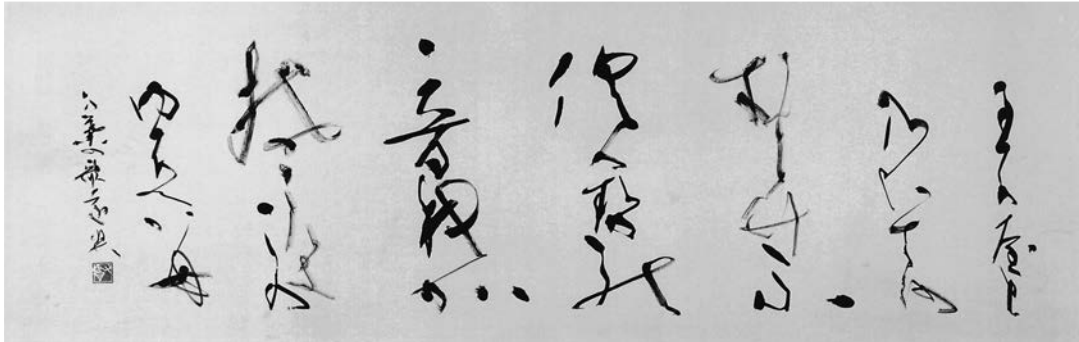
「わくわくワークショップ『手紙を書こう!』という、小・中・高校生から気に入った作品の感想や質問を集める企画を実施しました。5年目の今年も394通のお手紙をいただきました。

すごく筆使いが上手！筆の「メリハリ」がついている！強弱！とめる所はとめる！
あっとうされた！
私も賢一さんのような強弱がついたカッコイイ字をかけるようになりたいです！
これからも頑張ってください！
応援しています！

陽愛さん11歳

筆の「メリハリ」がついている。こんな作品の見方ができるのは、すごいと思います。もの事すべてに通じることですが、書道の作品も「強弱」や「メリハリ」が特に大切な要素です。陽愛さんを“あっとう”させることができよかったです。これからも多くの人を感動させることができる作品が書けるようがんばります。手紙ありがとう。

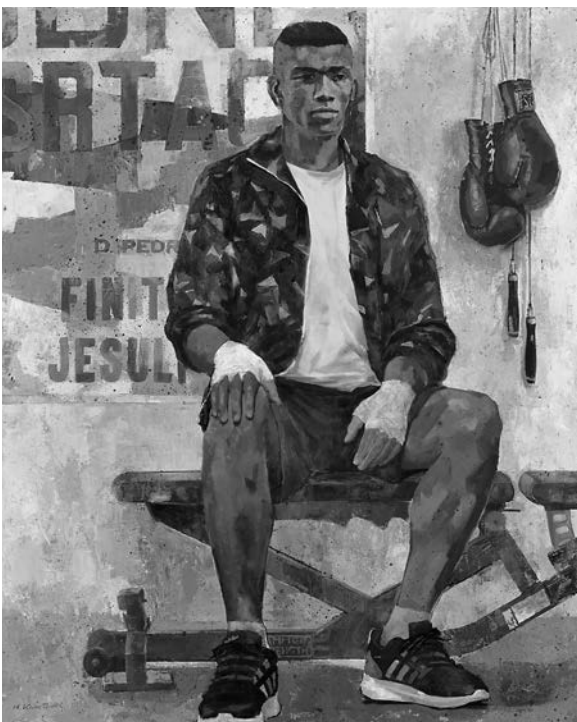
黒田賢一



(書) 黒田賢一 <竹風>

中心にいる人物の顔や服が、凹凸の面にとらえられていて、骨とか筋肉の強そうな感じ、洗練された感じがかっこよくて引き付けられました。背景も色数が少なく落ち着いた雰囲気だ一人座る人物の力強さを際立たせていてすごかった。
人物が何をみつめているのか、何に向かって努力しているのかが気になりました。また、色合いは何を意識していますか。

紗礼さん15歳



(洋画) 金築秀俊 <GYM>

私の作品に対してお手紙をいただきありがとうございます。絵を見ていただいた方から直接感想が聞ける機会は少ないので、新鮮に感じました。手を離れた時点から作家はその絵について語ることはできません。人物が何をみつめているのか、何に向かって努力しているのか、ご質問の答えはそれぞれの観覧者の感性に委ねています。今回の絵は青味がかかったグレー調になりましたが、実は下塗りには真逆の激しい赤や鮮やかなエメラルドグリーンが隠れています。静かに座っている人物の内面に激しく燃えるパッションがあることを描きたいという思いで制作しています。

金築秀俊

開催地	会 期	会 場	開 催 者
東 京	令和6年11月1日～11月24日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
京 都	令和6年12月21日～ 令和7年1月18日	京 都 市 京 セ ラ 美 術 館	日展京都展実行委員会
名古屋	令和7年1月22日～2月9日	愛知県美術館ギャラリー	中 部 日 展 会
神 戸	2月15日～3月23日	神戸ゆかりの美術館 神戸ファッション美術館	神戸市展社 公益社団法人 日 展 神戸新聞
富 山	4月25日～5月11日	富山県民会館美術館	北 日 本 新 聞 社

初入选。同六十二年日展会員、平成八年日展評議員、同十年日展理事、日本芸術院会員、同十一年日展常務理事、同十三年日展事務局長、同二十一年日展理事長、同二十五年日展常務理事、同二十六年日展理事、同二十七年日展顧問、

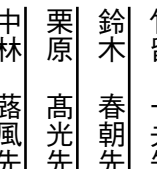


陣 軍陽先生(書・会員) 6・9・22
中山 忠彦先生(洋画・顧問) 6・9・24
(日本芸術院会員)
八十九歳。昭和十年
福岡県生まれ。昭和
二十九年第十回日展

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

表紙	内閣総理大臣賞 田中徹夫「花の姿」
上	内閣総理大臣賞
右中	武腰一憲「月の器・帰路」
右下	文部科学大臣賞 能島浜江「樹の一本(つの木)」
左中	内閣総理大臣賞 上田久利「風のおと(萌し)」
左下	文部科学大臣賞 寺久保文宣「(書) 樹の音」

同三十年日展理事、令和元年旭日中綬章受章、同二年日展顧問。昭和六十一年第十八回日展審査員(以降合計十二回)。



西山 自耕先生(書・会員) 6・9・25
尾崎 邑鵬先生(書・顧問) 6・10・11
百歳。大正十三年京
都府まれ。昭和二十
九年第十回日展初入
選。同四十八年日展
会員、同六十一年日展評議員、平
成五年日本芸術院賞受賞、日展理
事、同十年日展常務理事、同十二
年日展理事、同十六年日展参事、
同二十八年文化功労者、同二十九
年日展顧問。昭和四十七年第四回
日展審査員(以降合計十回)。

同三十年日展理事、令和元年旭日中綬章受章、同二年日展顧問。昭和六十一年第十八回日展審査員(以降合計十二回)。



同三十年日展理事、令和元年旭日中綬章受章、同二年日展顧問。昭和六十一年第十八回日展審査員(以降合計十二回)。

同三十年日展理事、令和元年旭日中綬章受章、同二年日展顧問。昭和六十一年第十八回日展審査員(以降合計十二回)。

編集委員 亀山 祐介 西田 真人
浅見 文紀 前原 喜好
野原 昌代 堀内 秀雄
上原 利丸 村田 好謙
歳森 芳樹 福光 幽石

座談会では、今回やや出品者数の減少が見られその対策が話題となり、今後の日展のあり方について、(伝統と新たな表現、今の社会に共感が得られる表現とはなどが話され、今後議論が進むと思います。日展ニュースでは日展(日本美術展覧会)の今と未来を見直し、新たな挑戦者発掘の力になることを目指していきたいと思えます。皆様のご意見をお寄せください。(堀内)

同三十年日展理事、令和元年旭日中綬章受章、同二年日展顧問。昭和六十一年第十八回日展審査員(以降合計十二回)。

コロナ前の状況に戻りつつと言われながらも、パンデミックの経験は社会を大きく変え、インフラが、災害・紛争が、芸術の価値観を猛スピードで変化させている、そんな思いが致します。
今号では、例年実施している理事長、副理事長・事務局長、審査主任による審査を終えての座談会をダイジェストで、また外部審査員の貴重なご寄稿と各受賞者・新入選者からの喜びの声も掲載致しました。

編集後記